慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	大来佐武郎著 アジアの中の日本経済
Sub Title	
Author	深海, 博明
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.9 (1966. 9) ,p.1019(109)- 1020(110)
JaLC DOI	10.14991/001.19660901-0109
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660901-0109

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

相伝で住みつくことになってしまった。メタイエ貧窮の有力な証拠 徴とする。 とみるわけだが、 に探ろうとした。メタイエは動きがとれない。そしてメテリに父子 はこの点の指摘を忘れない。そしてメタイエ窮乏化の真因を、そこ み台にほかならない。ガロ教授はこの論稿で、 命に突入した。革命はガティヌで、 いかんにも通じた。一般に後進地では、 た ガロ教授の論稿はまた、後進地の地主制が革命に対応する問題 地主制はガティヌにおいて、メタヤージュとして 現象 する にもかかわらず封建諸力は重圧に感じられる。ガロ教授 ガロ教授は正鵠を得ていた。破棄すべきは、 地主制が一大飛躍するための踏 領主支配の稀薄なことを特 そのことを示したか

諸規制であった。

原題は、Marcel Garaud, 'Le régime agraire et les paysans de Gatine au XVIII'e Siècle,' Bulletin de la Société de Antiquaires de l'Ouest et des Musées de Poitiers, 2° Trimestre de 1954, p. 643-682 と所収。

新刊紹介

大来佐武郎著

『アジアの中の日本経済』

最近、いわゆる南北問題といった形での低開発国問題に対する関心が高まり、とくにそのなかでも、本年四月に東京でわが国の主催のなかでも、本年四月に東京でわが国の主催の、低開発国問題に対する関心が高まり、とくにそ

書が発刊されている。の的な研究・分析が盛行しており、時流にのの的な研究・分析が盛行しており、時流にのしかしわが国の場合、これに関するきわも

局に約二年間勤務し、帰国後も第一回アジア・国連アジア極東経済委員会(エカフェ)事務下に自ら 記されている ように、「戦後、昭和アジア諸国を訪れ、その後、バンコクにあると一周したが、そのさいインド、タイなどのこ十五年にはじめて、経済の調査のため世界に自ら記されている ように、「戦後、昭和月に約二年間勤務し、帰国後も第一回アジア・

アフリカ会議をはじめ、数多くの低開発国間アフリカ会議をはじめ、数多くの低開発国間題への関心を持ちつづけている」(序i—i頁)のであり、本書は、大来氏のこのような長期間にわたる関心、実際の低開発のような長期間にわたる関心、実際の低開発のような長期間にわたる関心、実際の低開発のような長期間にわたる関心、実際の低開発国間関係についての現地での調査・諸活動、その問題についての現地での調査・諸活動、そのというなどのような、数多くの低開発国間では、大きな特徴があるといえる。

来氏は一九六一年には、エカフェの「アジア して、 いわゆる「三人委員会」のメンバーの一人と 地域経済協力に関する専門家作業グループ」 手を加え、再構成したものであるが、この間大 てアジア経済に関して執筆した諸論文に若干 参加しているし(第2章参照)、本年一月には、 貿易開発会議にはわが国の代表の一人として 実際にインドに招かれて、 るし(第1章参照)、 経済発展に関しての助言を行なっている(第 の現実との密接な関連において、 って、世界経済の政策担当者および低開発国 4章参照)など、世界経済の潮流の渦中にあ しかも本書は、 地域協力に関する報告書を作成してい この二・三年の間に主とし 一九六四年の第一回国連 とくに教育問題と これらの論

> がある。 文がかかれている点にもう一つの大きな特色

第 2 章 第3章までが、低開発国開発に対してもっと と日本、の四章よりなり、そのすべてが日本と 低開発国貿易と日本、第4章 インドの将来 れており、 **₹** Ŗ も重要な政策問題を論じており、 いう視点を忘れずに展開されており、とくに インドというケース・スタディで あり なが されている。 本書は、第1章 体制、 むしろ低開発国開発の前提条件となるべ 低開発国援助政策と日本、 、制度、組織、 なかなかたくまずして見事に構成 アジアの地域協力と日本 教育の問題が論究さ 第4章では 第3章

本書の特徴としては、すでにのべたよう に、実際的な世界経済の流れ・活動との関連に、実際的な世界経済の流れ・活動との関連 に、実際的な世界経済の流れ・活動との関連 に、実際的な世界経済の流れ・活動との関連 たメリットが見出され、さらにかなりユニー たメリットが見出され、さらにかなりユニー たメリットが見出され、さらにかなりユニー たとの主張(二二~二三頁)、エーシャン・シーウ の主張(二二~二三頁)、エーシャン・シーウ の主張(二二~二三百)、などに代表される) が含まれているといった点も、指摘できる。

一〇九(二〇一九)

新刊紹介

要であるように思われる。 要であるように思われる。 要であるように思われる。 要であるように思われる。 の論、積極的に低開発国とくにアジア問題 が高、積極的に低開発国とくにアジア問題 が高、積極的に低開発国とくにアジア問題

ただ本書は、すでに発表された論文をまとめたものであるので、現在の時点において考えれば、大幅に書きあらためる方が、より有益ではないかと思われるものがいくつか目に益ではないかと思われるものがいくつか目についたし、また本書に断片的に言及されている理論的研究をさらに体系的かつつっ込んで

によめるにもかかわらず、読了したあとに何人々に広く一読をすすめたいし、むしろ手軽低開発国問題とくにアジア問題に関心ある

B6・二三九頁・三六〇円) B6・二三九頁・三六〇円) B6・二三九頁・三六〇円) B6・二三九頁・三六〇円)

—深海博明—

『インド木綿工業史』西村孝夫著

的研究の大部分は、ヨーロッパ的進歩に対す とこれは十六世紀以来東洋に進出したヨーた。これは十六世紀以来東洋に進出したヨーロッパ諸国のインドとの接触が外面的なものであったからである。インド社会の内部とのである。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ人の目に映である。しかしそこでヨーロッパ的進歩に対する研究の大部分は、ヨーロッパ的進歩に対する研究の大部分は、選出では、

> するには、 結合して あげて、 構造の中で追求して行く、 自立問題の焦点となっている木綿工業をとり て最も古くからインドの社会に根をおろし、 的普遍主義史観」 と、その限界の分析が必要であると考えられ結合していた社会構造を破壊して行った過程 されている。 十九世紀以降のインドの荒廃と、現代の経済 りあげる態度を批判して書かれている。 るものとなった。 ているからである。 るアジア的停滯として経済の後進性を強調す インドにおける綿業と農業が古い形では、ヨーロッパ資本、特にイギリス資いる。インドの停滞の条件を明らかに これをインド全体の社会機構・経済 本書は、 に基いてインドの経済をと この「ヨ 実証的立場が主張 ロッパ そし

本論で、インド木綿工業の原型は、それが 本論で、インド木綿工業の原型は、それが 表盛期にあった十六―十七世紀のものにおかれる。ヨーロッパ諸国と直接の接触がなかったそれ以前の時期については、前史として扱われている(第一章)。原型である綿織物生産われている(第一章)。原型である綿織物生産 大学 農民の共同体とそれを規制するカースインド 農民の共同体とそれを規制するカースインド 農民の共同体とそれを規制するカースインド 農民の共同体とそれを規制するカースト制の関連において検討され、商人や王侯のト制の関連において検討され、商人や王侯のにおいて、

される。 三章)。それに つづく フランス・イギリスと 象して求められたのである(第二章)。 どのように変化し破壊されて行ったかが追求 産者の支配、イギリス産業革命との関連、 である東インド会社によるインド手織綿布生の接触(第四章)。イギリス資本の本格的進出 この原型がヨーロッパ資本との接触により、 給国、製品の販売市場となったインドの経た 支配下においてイギリス綿工業の為の原料供 の後のイギリスの対インド政策の変更と、 社会経済構造上の変化(第六章)という順序 ンド綿工業の没落過程(第五章)、 点にまとめられた(終章)。 技術・生産構造・市場・政府の経済政策の諸 に及ぼした作用は現代の問題として、改めて である。第二次世界大戦とその結末がインド ポルトガル、オランダとの接触 イギリスの 次いで 第 そ

がて、それが十七世紀以前のインド社会に対けて、それが十七世紀以前のインド社会に関するまのである。後者ーのインド社会論に関するものである。後者ーのカーストや宗教の側からの分析をとりあーのカーストや宗教の側からの分析をとりあーのカーストや宗教の側からの分析をとりあいてはインドの社会構造研究におけるウェーバーのカーストや宗教の側からの分析をとりあいた。 がて、それが十七世紀以前のインド社会に関する業

> っている。 性に関しては十分なものでない点の批判を行しては優れたものであるが、それ以後の停滞

○円) 一九六六年三月刊・A5・二二○頁・一五○して、発展性の ある 好著である。(未来社・して、発展性の ある 好著である。(未来社・

—三宅昱子

越智武臣著

『近代英国の起源』

著者は、先年物故したロンドン 大学 の 碩者者は、先年物故したロンドン 大学 の 碩という枠組の中で再検討し、近代英国のトレという枠組の中で再検討し、近代英国のトレーガーが如何なる社会層に属したかを究明せんとしたものである。

連の政治変革の中に求める。この時代の国際国民国家としての成立を、一五三〇年代の一国家の覚醒」において、著者は、近代英国の国帝一章「政治変革の 進展」、第一節「国民

転換点も又、一五三〇年代であった。 近代国家の前提条件としての行政制度の即ち宗教改革を余儀なくさせたからであったが故に、教皇権に対する国家教会の定立、たが故に、教皇権に対する国家教会の定立、たが故に、教皇権に対する国家教会の定立、政治、殊にイタリア戦争が、英国国民の対自政治、殊にイタリア戦争が、英国国民の対自

第二節「絶対王政の風土」は、これ迄の「絶新たな視角、即ち絶対君主エリザベスとそれ新たな視角、即ち絶対君主エリザベスとそれが出義論争」を実り多さものとするために、対主義論争」を実り多さものとするために、対主義に、即ち絶対君主エリザベスとそれが出方主義、州の重要性が強調される。 更政治の実権を握っていた階層こそ、地方名望政治の実権を握っていた階層こそ、地方名望家、ジェントリーであった。

第三節「革命政治の底辺」では、いわゆる第三節「革命政治の底辺」では、いわゆる第三節「革命政治の底辺」では、いわゆる方インガムシャーの一寒村での現地調査をもテインガムシャーの一寒村での現地調査をもティンガムシャーの一寒村での現地調査をもたして解明されている。

111(10111)